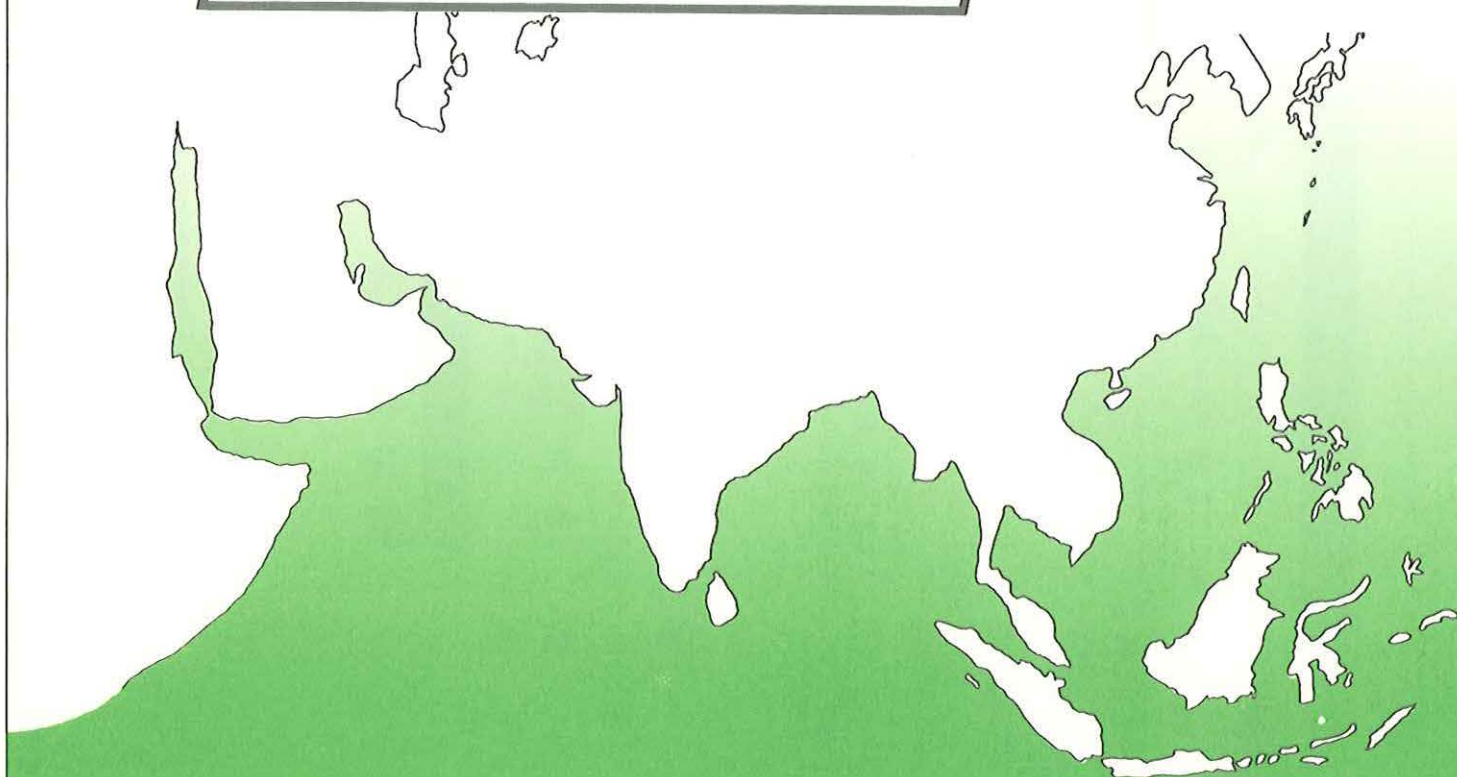


Asian Population & Development

アジア

人口と開発

ISSN 0911-5684



1987・No.20

財団法人 アジア人口・開発協会 (APDA) 発行

目次

巻頭言

1

第三回人口と開発に関する

アジア国会議員代表者会議

2

10カ国参加・バンコクで開催

挨拶要旨

●生活水準と福祉向上の実現に向って

7

財団法人アジア人口・開発協会副理事長
人口と開発に関するアジア議員フォーラム議長

佐藤 隆

●人類全体の平和と福祉を願って

8

国際人口問題議員懇談会会長
人口と開発に関する国会議員世界委員会会長

福田 赳夫

●報告と問題提起 ― その概要 ―

■インドネシア ― 農村 ―

農村人口と農業開発調査

12

東大東洋文化研究所助教授

原 洋之介

■インドネシア ― 都市 ―

都市人口と開発

13

日大人口研究所名誉所長

黒田 俊夫

■日本

日本の労働力人口と開発

17

インドネシア事情について

20

在インドネシア日本大使館一等書記官

松野 裕

“人口と開発”関係刊行物紹介

28

人口問題に献身したR・サラス国連人口活動基金事務局長が逝去

29

APDA・日誌

30

財団法人アジア人口開発協会発足並びに議員活動

31

本協会実施調査報告書及び出版物

巻頭言

この三月九、十の両日、ローマで開かれたインターアクションカウ
ンシル（OBサミット）の代表と、世界の五大宗教指導者との間で、
世界平和をテーマに、人口問題が討議されたが、世界平和と人口問題
解決のためには家族計画が必要である、と合意され、ステートメント
にも盛りこまれた。まことに画期的な出来事である。

この世界宗教政治指導者懇談会には、政界から福田赳夫国際人口問
題議員懇談会会長を議長に、シュミット元西独首相ら七人、宗教界か
ら七人が参加し、史上初めての会議と、合意が実現したのである。

長年にわたり、人口問題の分野において宗教はタブー視され、乗り
越えられない壁となっていた。カトリック教会における産児制限に対
する姿勢は、罪悪視されるなど厳しいものであることは、周知の通り
である。

しかし、本財団副理事長でありAFPPD（人口と開発、アジア国
会議員フォーラム）議長の佐藤隆代議士は、宗教と政治の間に「人口
問題」のかけ橋を渡すことを、国際会議のたびに堤唱し続けてきた。
その懸案が実現し、ようやく解決への緒についたのである。

こんどの会議は人類の明日につながる、宗教と政治の間の虹のかけ
橋といっても過言ではない。

宗教懇談会の歴史的意義を高く評価するとともに、今後の実りある
誠実な歩みに期待したい。

議者代表国会議員アジアに関する

10カ国参加、バンコクで開催



OPENING CEREMONY OF

開 会 式 ータイ国国会議事堂会議場ー

(右から) 福田赳夫元首相、ウクリット・タイ国国会議長、佐藤 隆本協会副理事長、プラソップ・タイ人口懇会長

THE 3RD ASIAN PARLIAMENTARIANS' MEETING

第3回人口と開発に

財団法人アジア人口・開発協会（APDA）主催の「第三回人口と開発に関するアジア国会議員代表者会議」は、二月二十三日から二日間、タイ国バンコク、国会議事堂会議場およびESCAP会議場にアジア十カ国の国会議員代表と、関係者など約五十人が参加して開かれた。

同会議は、第一回、二回を東京で開催し、はじめて海外での開催となった。

会議では、同協会が委託しインドネシアで実施した「インドネシアの農村人口と農業開発に関する調査」（原洋之介・東大東洋文化研究所助教授）、「インドネシアの人口・開発基礎調査」（黒田俊夫・日大人口研究所名誉所長）、「日本の労働力人口と開発」（同）、さらに開催国を代表して、「タイの村落レベルでの人口と開発」（ミツチャイ・ウィラウアイタヤ・PCDP事務局長）、「現在及び将来の開発計画に関する年齢構造変動の政策的合意」（ニボン・デババルヤESCAP人口部長）の各報告と、問題提起があり、熱心な討議が行われた。

また、スライド「日本の産業発展と人口―その原動力・電気」（本協会制作）、映画「明日に向かって」（中国計画生育委員会制作）が上映され、示唆に富む内容が好評だった。

さらに、各国のカントリーレポートも発表され、参加者の熱心な討論、意見交換が行われた。

会議参加者

● 中国

ヤン・レン・ヤン（議員）



代表者会議風景

● 韓国

K・J・ドング（元労働大臣）

● マレーシア

R・オスマン（運輸副大臣・AFPPDオフィサー）

● ネパール

D・S・ラナ（人口・開発議員連盟会長）

P・B・サポクタ（人口・開発議員連盟メンバー）

何理良（外交部国際司参赞）
ジャン・タンシイ（外交部幹部）

董 玉昌（国家計画生育委員会外事局副局长）

周 惠民（全人代常务委员会
弁公庁外事局美大処副処長）

● インド

S・P・ミッター（上院議員、AFPPD事務総長）
M・プラシャド（議員）

● インドネシア

マルトノ（移住大臣）
T・センブリング（移住省調査開発センター調査員）

R・D・パント（国家人口委員会経済顧問）

● シリア

H・サディック（AFPPOフィサー）

● スリランカ

U・B・ウィジェクーン（ジャフナ自治大臣）

● タイ

プラソップ・R（上院議員）

M・L・トリドシユス・V（上院議員）

V・ビトゥーン・O（上院議員）

プアングルト・W（上院議員）

ブーンスク・L（上院議員）

○ 来賓

福田赳夫（元首相、国際人口問題議員懇談会会長、人口と開発に関する国会議員世界委員会理事長）

ウクリット・M（タイ国国会議長）

● 専門家

黒田俊夫（日本大学人口研究所名誉所長）

原 洋之介（東京大学東洋文化研究所助教授）

ミツチャイ・V（人口・地域開発協会事務総長）

ニボン・D（ESCAP人口部部長）

オブザーバー

● 国連人口活動基金（UNFPA）

安藤博文（総務財務部長）

J・シン（広報部長）

J・パースンズ（バンコク地域事務所代表）

● インドネシア家族計画協会（IPPA）

F・X・スプロト（ジュクジカルタ事務所長）

● アセアン人口調整委員会（APCU）

B・デ・レオン（事務局長）

日本側参加議員

佐藤 隆（衆・自民）

林 寛子（参・自民）

石井一二（参・自民）

有島重武（衆・公明）

阿部昭吾（衆・社民連）

伊藤忠治（衆・社会）

挨拶要旨

生活水準と福祉向上の 実現に向って

財団法人アジア人口・開発協会副理事長
人口と開発に関するアジア議員フォーラム議長

佐藤 隆

APDAは、一九八一年十月、世界で初めての地域会議として北京で開催された「人口と開発に関するアジア国会議員会議」の結果を受けて、AFPPDを発足するにあたり、一九八二年二月に設立され、早いもので五年目を迎えました。これも偏に、設立当初から多大なるご支援とご指導をいただいております。UNFPAラファエル・サラス事務局長はじめ皆様のご協力の賜物と、心より御礼を申し上げます。

この度の会議の討議資料として提供されますのは、開催国であるタイをはじめ、インドネシアでの調査結果および日本の事例に関するものであります。特に、インドネシアでの都市および農村における調査の実施にあたりましては、ご出席のマルトノ大臣並びにインドネシア移住省の皆様にも多大なるご指導、ご協力を頂きました。ここにあらためて感謝申し上げます。

ご高承の通り、アジアの人口は世界の六十パーセントを占めております。世界人口は国連の推計によると本年七月一日には四九億九千七百六十万九千人になるとしており、さらに日本の厚生省人口問題研究所が計算したところグリニッチ標準時による七月十一日には五十億人を突破する、ということでもあります。

人口問題は、人類生存の基本である食糧や資源のアンバランス、また経済発展過程における人口の地域構造の問題、高齢化等人口構造上の問題、開発計画への圧迫等々、世界に大きな課題を投げかけております。我々アジアの立法府議員が、一九七九年のスリランカ会議以来、

中国、インド、メキシコ、日本等において、人口と開発について討議・検討を重ねてきた目標は『個人・家族の生活水準と福祉の向上』と、いうことにあります。この目標の実現に向けて、関係者が一堂に会し、あらゆる習慣、文化、思想、宗教を超えた国境なき討議がなされることは、人口と開発問題の解決、ひいては世界平和のため、誠に意義深いことであります。

皆様の積極的な意見交換とご討議をお願い申し上げます。

挨拶要旨

人類全体の 平和と福祉を願って

国際人口問題議員懇談会会長

人口と開発に関する国会議員世界委員会会長

福田 赳夫

私は、地球人類の前途を深く憂慮しています。世界平和が重大な危機に直面しているからです。

世界平和を脅かしている要因は多々ありますが、中でも次の三つの問題は極めて深刻です。

第一は、東西両勢力の対立とそれに伴う軍拡競争の激化です。第二には世界経済の問題です。そして第三は世界人口の激増と、これに関連する開発や生活環境などの問題です。

戦後四十余年の世界は東西対立の図式で動いて参りました。その中から生まれた東西間の軍拡競争は八十年代に至って一層深刻となり、特に核軍拡の結果、人類を六十回以上も滅亡させるだけの核戦力が両陣営に備蓄されるに至りました。それが使用されたら正に地球人類の終焉です。ですが、それが使用されないという保証はないのです。私は戦慄を覚えます。

経済の側面も憂慮に耐えません。十三年前の石油ショック以来、世

界経済の旧秩序は崩壊し、新しい軌道はまだ樹立されるに至りません。アメリカをはじめ、どの国も大きな困難を抱えています。そのなかで、発展途上国は長きに亘る経済停滞に喘いでいますが、累積債務問題は特に深刻です。いつ国家的倒産という国が出てこないとも限りません。個々の国々の経済の不安は、やがて社会的・政治的混乱を引き起こします。そのような国が多発するとき世界はどうなっていくのでしょうか。世界の政治・軍事情勢や経済の問題は、本日の会合の主題ではありませんから、私はこれ以上深入りすることを避けますが、私が平和を脅かす要因の最後に指摘した人口とこれに関連する諸問題こそは最も基本的で、しかも最も困難な問題です。

申すまでもなく、政治の目標は平和を維持し、その中での人間生活の向上改善を期するものでなければなりません。その実現の途上において、常に問題を提供するのが、人口の増加です。一九〇〇年に十六億五千万人であった人口は、今年一九八七年には五十億人を越えるのです。その五十億人は十三年後、つまり世紀末には六十一億人と、世紀初頭の四倍になると見られます。地球上の食糧・資源・環境など人間生活の前提条件が有限なのに、その利用者である人間だけが無限に増え続けたらどうなるのか。これは国境を越えた全人類的、全地球的問題であります。

民衆の代表として働く我々政治家は、立法府の立場から有効かつ適正な政策を立案、実施していくことに大きな責任があると考えます。

私は、一九七四年に世界に先駆け発足した、日本の国際人口問題議員懇談会の会長を、岸信介先生のを継ぎ、一九八十年以来お引受するとともに「人口と開発に関する国会議員世界委員会」を発足して、全世界の国会議員がより人口問題に関心をもち、立法府議員としての役割を果たすよう訴え続けてまいりました。

今日ここで開催される会議にご出席の皆様は、立法府議員としての我々の役割などについて十分認識され、その上に立って各論の討議に

入ろうとしているのであります。私は、人口問題解決の急務を考える時、本来、世界各国の国会議員が既に各論に入っておらねばならない時期である、と強く感じており、此の度のような会議が開かれることに大変心強くされるものであります。

本日のこの会議は第三回目ということですが、参加者の皆様をはじめとして関係者の方々のご努力に改めて感謝と敬意を表したいと思えます。

世界人類全体の平和と福祉を願う我々は、これらの諸問題を少しでも早期に解決させるため、目前にあるあらゆる障害を乗り越えるため最大限の努力を払うべきであります。多様化していく「人口・開発問題」解決のためには各国の特殊性に応じた、バランスの取れた総合政策の確立に大いなる努力を向けなければなりません。

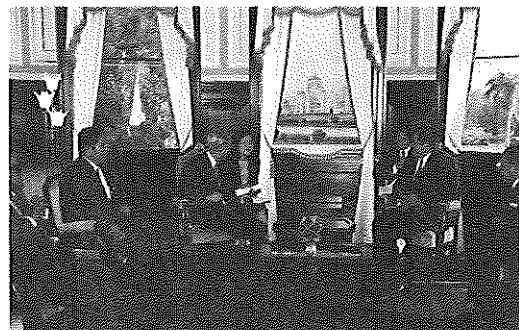
また、各国政府にとって適切と考えられる政策を実施する場合にも、ベーシックな問題であるが故に、非常に困難を伴ってしまわざる得ない宗教の壁のようなデリケートな問題もありますが、こうしたデリケートな事柄についてさえも、むしろ声を大にして問題提起をし積極的な話し合いを進めていけるような前向きな姿勢と努力が必要と考えます。

人口と開発に関する、こうした地道な議員活動の中で、数年前より宗教の問題が取り上げられはじめましたが、これは確かに避けて通ることのできない大きな問題の一つです。

私はこのことの重要性を強く認識し、所謂「OBサミット」の招集者として、昨年四月、日本にて開催いたしました同会議の第四回総会における演説のなかで『人口・開発・環境』の問題の重要性を強調しました。その結果、同会議の宣言文のなかに『現下の世界的な人口危機に対処する新たな方策として、宗教界との現実的・効果的な対話と理解および協力が不可欠である』との旨が全会一致で採択されました。

この対話の機会は近く実現する運びとなりましたが、私はこれが人

スナツプ (バンコク会議より)



国会議事堂にタイ国ウクリット国会議長（右から2人目）、を表彰した佐藤隆APDA副理事長（左から2人目）と、福田GCPPD会長（その右隣り）。



熱心に各国レポートを聞く＝左から阿部昭吾（衆・社民連）、伊藤忠治（衆・社会）、佐藤隆（衆・自民）、有島重武（衆・公明）、石井一二（参・自民）の日本側各議員＝エスカップ会議場で＝



和やかなレセプション風景＝左から林寛子議員、マルトノ移住大臣（インドネシア）、ヤン議員（中国）、福田赳夫元首相、同夫人、ブラソップ議員（タイ）、佐藤隆議員、サディク議員（シリア）＝ドウシタニ・ホテル＝



福田赳夫グローバルコミッティ会長（元首相）主催のレセプション＝ドウシタニ・ホテル＝

口問題解決に向けた一つの大きな前進となるよう心からの期待をしております。

一九七九年、スリランカで「人口と開発に関する列国議員会議」が開催されて以来、我々議員の活動は、夫々の国において、また夫々の地域において年とともに盛んとなり、着実にその歩みを進めて参りました。その世界的活動のなかの一ムーブメントとして、此の度の会議が実り多く価値あるものとなりますよう、世界人類の平和と繁栄のため切に希望いたします。

報告と問題提起

その概要

インドネシアⅡ農村Ⅱ

農村人口と農業開発調査

原 洋 之 介

(東大東洋文化研究所助教授)

今日、インドネシアは米の自給達成という画期的な成果をわずか二十年にしてあげ、その農業開発上新たな段階を迎えるにいたっている。一方、現政府は人口の外領への移住促進を図るため、ジャワ、バリ島の人口圧力緩和と併せて外領諸地域の産業開発推進の観点からこれを重視して来たが、これは農林水産業開発協力、さらには経済協力上新たな課題を課することとなる。米の自給達成後の課題は何かということ、さらには人口の外領移住促進にはどのような協力が必要とされるかということであり、もっとも基本的には移住がジャワ、バリ島の人口圧力の軽減、緩和をもたらすかどうか、また、その目的推進のためにはどのような形での協力が必要か、というようなことである。

このため、われわれはインドネシアの中央、地方の政府関係者その他関係者に情報と資料を求める一方、自ら移民送出源たるジャワ島農村及びスマトラのランポン、スラベシの移住村を訪ね、併せて、アンケート調査を、それぞれ一カ村五〇人、計一五〇人を選んで行なうこととした。アンケート調査には現地法人調査開発センターのメンバー諸氏が農民の在宅時を選んで、早朝あるいは夕食後訪ねるなどして非常な協力をしていただいたが、その所要労力は延べ百人にも上ったか

と思われる。しかも集計の労まで払っていただいたが、これは一に移住担当大臣マルトノ氏以下調査開発センターの関係各位の非常な協力の賜という他ない。心からなる謝意を表しておきたい。

インドネシア農業開発における農業協力の位置付け、ならびに人口圧力緩和の可能性との関連についていうならば、次の通りである。農業協力を効率的に受入れる体制はすでに、インドネシア自体において組織としても、農民の心理、姿勢としても、安定的なものとして定着していると思える。人口問題との関連では、生産性上昇がさらに出生増や人口の自然増を招来する可能性は、内領においても外領においても、すでに抑制されつつあると思えるであろうということである。もちろん、人口の自然増加率はなお、国全体として二・三％水準と想定されているが、これは過去の二・四％（一九七一）水準からすれば確実に低下であり、事実、家族計画の体制は、保健所など指導協力の社会体制も、男女を含めて当事者たちの受けとめ方もかなり確固たるものとして定着しつつあると思われた。

インドネシアⅡ都市Ⅱ

都市人口と開発

黒 田 俊 夫

（日大人口研究所名誉所長）

ほう大な人口、その増加抑制と経済開発、生活水準の上昇という今日のもっとも重大、そして困難な課題に果敢に挑戦し、着々と成果をおさめつつあるインドネシアは、世界の開発途上国を代表するすぐれた lesson である。

一九八五年のインドネシアの人口はすでに一億六千六百万人を越え、二千年には二億千百万人、二〇二五年には二億七千三百万人に達すると推計されている大人口国である（国連、一九八四年推計）。そして、

豊かな天然資源にめぐまれ、その開発に必要な労働力人口も豊富である。食糧生産能力の画期的な増大によって自給を達成した。しかし、もちろん他方においてなお解決を要する重大問題があることはいまでもない。人口増加圧力緩和のための出生率の引き下げ、きびしい人口分布の不均等の是正と開発の推進といった重大な緊急課題を抱えている。これに対し、建国の本義ともいべき五原則のパンチャシーラや地域社会のゴトン・ロヨンの相互扶助精神を基調とした総合的対策が実施されている。

インドネシアは世界できわめて異色のある国の一つである。一九八五年の人口は一億六千六百万人でアメリカ合衆国に次ぐ世界第五位の大人人口国である。一万三千六百以上の島から構成されている。とくに、カリマンタン、スマトラ、イリアン・ジャヤ、スラベシ、ジャワの五つの大きな島があるが、スラベシ、ジャワ島を除く他の三つの島はいずれも日本より大きい面積をもっている。中でもカリマンタンは約五十四万平方キロで、日本の三十七万平方キロの一・五倍に近い大きさである。インドネシアの陸地面積は約一九二万平方キロで、日本の三十七万平方キロの約五・一倍に当たる。しかし一平方キロ当たりの人口密度は八四人で、日本の約四分の一にすぎない。

第一の特徴は、人口の地理的分布が著しく不均衡であることである。このインドネシア人口一億六千六百万人の六〇・六％に当たる一億五十六万人は、全国土の六・九％にすぎないジャワ島に住んでいる。したがって、ジャワ島の人口密度は一平方キロ当たり六九〇人に達し、日本の人口密度三・五人の二倍以上の高密度である。このことは他の島の人口密度がきわめて稀薄であることを意味している。たとえばもつとも大きいカリマンタンの人口密度は二人、イリアン・ジャヤではわずか五人にすぎない。ジャワの灌漑の行われている農地面積当たりの人口密度は一平方キロメートル当たり二〇〇〇人であって、日本の農用地面積一平方キロメートル当たりの人口密度（二一八三人、一九

八二年）に匹敵する高密度である。ジャワ島の巨大な人口はそれなりに理由がある。それは火山性の肥沃な土壌にめぐまれていることである。その結果、農村人口の著しい増加があっても農業への労働力の追加投入によって労働生産性を上げることができた。しかし、このような増加人口の吸収にも限界があり、労働生産性は低下し、農家所得は減少するに至った。一九八〇年には、ジャワ農村人口の四七％は絶対窮乏線以下にあったのに対し、他の島の農村では二八％と低かった。

このようなジャワ島における人口過密と農村の貧困は、ぼう大な人口稀薄地の島々への移住政策に対する関心を高めることとなった。すでにオランダ統治下の時代に移植民政策が開始されている。そして、インドネシア独立後、一九五〇年に「Transmigration」とよばれるようになったプログラムが政府の重大な政策として次第に強化されていった。このインドネシアの人口移住政策は、人口再分布政策としてののみならず、開発政策としての重要な意義と役割をもっていることはいままでもない。

第二の特徴は人口増加抑制のための家族計画政策とプログラムである。この国の家族計画プログラムは一九六九年に開始されたが、政府の強力な組織と下部機構に対する直接的な密接な指導体制は出生力低下を成功せしめている。とくに、政府関係機関との調整の役割をもった B K K B N (Badan Koordinasi Keluarga Berencana Nasional - National Family Planning Coordinating Committee) の組織とその活動については国際的にも評価が高い。国連推計によると、一九八五年の出生率は三二、死亡率は一三となっており、自然増加率は一・九％である。家族計画プログラム実施前の人口増加率約三％に比較すると著しい低下である。

人口増加率は地域によってかなり著しい差異がみとめられる。たとえば、一九八三―一九八四年についてみると、ジャワでは一・八八％

であるが、スマトラでは三・二三%、またカリマンタンでは二・九一%となっている。また、同じくジャワ島内でもジャカルタ市では三・八〇%と高い。スマトラのランブン（Lampung）ではさらに高く、五・五七%となっている。ジャカルタとランブンは主として人口流入の影響が大きいことはいうまでもない。しかし、バリ島では一・五〇%と著しく低い。これは幾多の調査によっても明らかにされている如く、家族計画の成功による出生力の低下によるものである。

第三の特徴は労働力人口の特殊性である。それは常用雇用労働者が労働力人口全体の三〇%未満といわれており、いわゆる informal sector の労働力人口が圧倒的に多いということである。マンパワール省で担当局長の話によっても、全国で五二%、ジャカルタでは五六%にも達しているという。いいかえれば、インドネシアの経済、あるいは労働力問題では informal sector を除いては理解できないという大きな比重をもっていることである。また、私どもの調査によっても、informal sector の労働者の収入水準が必ずしも常用労働者のそれよりも低いといった常識があてはまらないことがわかった。

私どもが移住省（Ministry of Transmigration）と共同して行ったジャカルタ市の実地調査においても informal sector の人々の居住する地区を対象とすると同時に一般企業体をも対象にふくめることによって比較研究を行う方法がとられた。この一般企業体を調査対象にふくめるというすぐれたアイディアはインドネシア側の提案によるものであった。

この調査については、調査対象の規模、範囲等においてジャカルタ市を十分に代表するものとはいえないし、また実地調査期間もきわめて短期に限定されていたため、結果の分析も不十分であり、また正確性を欠いている部分もあることと思われる。しかし、インドネシア側

日本

の周到にして適切なサンプル地域の選択と事前の適切な準備によって、調査はきわめて順調に行われたばかりでなく、示唆に富んだ有益な調査結果を得ることができたように思われる。この調査結果をどのように読みとるかは、インドネシア事情にうとい我々よりも、インドネシア側の担当者や専門家によってもっとも適切に行われるであろう。しかし、他方において我々の側からみた所見がすべて無駄であり、無益であるとも思われない。日本の現状についての外国人の分析や判断から、我々日本人が日本人であるがために気がつかなかったり、知らなかったような指摘が行われることがしばしばある。

私どもの分析が、なおたとえ不十分なものであっても、そのような意味で理解していただければ幸いである。

日本の労働力人口と開発

黒田 俊夫

(日大人口研究所名誉所長)

開発の最大の要素は労働力である。労働力という部分人口の大きさとその質は、その国の開発と生存を決定する基本的条件である。労働力の量に対して質の側面のもつ重要性が強調されるようになったのは、第二次大戦後である。労働力の量の増大が経済発展に対し重要な影響をもっていることはいままでもないが、労働力自体の質の貢献度が明らかにされるに至るとともに、教育を中心とする人間投資が重要視されるように至った。先進諸国における出生率の低下傾向にともなう労働力供給量の減少が確実視されるようになってきたことは、このような労働力の質の評価の意義の強調と無関係ではない。

しかし、労働力人口の決定要因はかなり複雑である。労働力の大きさは、年齢別男子の労働力参加率、年齢別女子の労働力参加率および

人口の年齢別・男女別構造によって決定される。さらに、この人口の年齢別・男女別構造は、その人口の出生率、死亡率、人口移動率によって決定される。しかし、同時に考慮を要する問題は、労働力への参加を決定する社会的、文化的、経済的要因である。とくに、女子の労働力参加率に対する文化的、社会的（あるいは宗教的）要因の影響は重要である。さらにまた、このような労働力参加率が産業構造の変化、職業の多様化、教育水準の上昇等の社会経済的進歩によって変化していくことも明らかである。

本研究は、日本における労働力人口を開発との関係において行った、かなり広汎な領域にまたがる研究である。

第一は「労働力人口と開発」という本研究の課題についての総論的な意義をもっている。「労働力人口学」といったアプローチの提唱、労働力参加率の総数としての粗活動率の安定性、日本の労働力参加率、男女・年齢別労働力参加率の歴史的変化、粗活動率と年齢別人口分布変動との関係、労働力人口の質的側面の重要性といった基本的な問題がとりあげられている。

第二は「労働力人口と経済発展」をあつかっている。労働力人口の母体である生産年齢人口の変化、労働力率の変化、労働力人口の変化、就業者の観点からみた経済発展、そして最後に就業者の年齢と産業構造の問題がとりあげられている。最後に、日本では労働力人口と経済発展の関係は有利な相互補充関係によって高度経済成長を遂げてきたが、これからの将来においては人口高齢化による幾多の困難な問題が生ずることを指摘している。

第三は「労働力人口と高齢化」を分析している。人口高齢化と労働力人口の高齢化、企業内における高齢化、高齢者の就業機会とその特徴の分析、また将来労働力人口の推計を行っており、その結果にもとづいて注目すべき提案を行っている。高齢労働力活用のために就業形態の多様化と広く各産業・職業への就労（特定産業・職業に集中しな

い）を勧告している。

第四は「労働力人口と技術革新」をあつかっている。技術革新の進展と雇用、高度成長期の技術革新の特徴、最近のME化技術革新の影響についての研究を行っている。技術革新の進展が雇用に与える影響が最近では企業規模によって著しく異なっており、最近の十年間（一九四六―一九五七）では、大規模企業における雇用の減少、小零細企業で増加という注目すべき傾向が生じていることが指摘されている。

第五は「労働力人口の地域分布」の研究である。日本の労働力人口の地域的分布の歴史的变化、労働力人口の地域別変動の特徴、労働力人口の地域別男女・年齢別分布構造、労働力人口の産業別構造の地域的差異、労働力人口の教育程度の地域的差異が分析されている。とくに、ここでも労働力人口の高い教育水準と高い労働生産性の相関関係が指摘されていることが注目されよう。

第六は「労働力人口の将来推計」である。労働力人口の将来推計は影響要因が複雑であり、総人口の将来推計よりも困難である。しかし、将来の開発計画にとつてはとくに重要な基礎条件である。ここではまず、労働力人口の将来推計の意義、推計方法が述べられ、ついで、戦前における推計、戦後一九六〇年までの推計、若年労働力の供給減少時代の将来推計、最後に人口高齢化期の労働力人口の将来推計（二千年までの課題）が考察されている。

本研究は労働力人口を開発との関連で考察した日本の経験である。戦後の荒廃から高度成長へと発展をとげ、さらに経済後退と人口高齢化の段階における労働力と開発の日本の経験は特殊なものであるとしてもなお、アジア社会の一つの経験としての意義はあるはずである。その意味において、アジアの多くの諸国の政策に多少なりとも参考になれば幸いである。

インドネシア事情について

インドネシアは、

東西の距離が五〇〇km、人口は約一億六五〇〇万人の約一三〇〇〇の島々からなる国であるが、地理的に見てもあるいはその人口を想像しても、おそらく一般に思われているであろうこの国の大ききよりは、はるかに大きいのではないかと思う。五一〇〇kmという距離は、アメリカのニューヨークからロサンゼルスまでの距離とほぼ等しい、あるいはインドネシアを南北に回転させたとしたらその首都のジャカルタから東京に達する距離であるといえはその国土の大きさが実感として分かる。また、人口についても中国、ソ連、インド、アメリカに次ぐ世界第五位の人口を有している。人口の増加率は約二%強であるが、これによる毎年の人口の増加は約三五〇万人に達し、また、労働人口の増加も年間約二五〇万人となり、同じアセアンのメンバーであるシンガポールの全人口、あるいは全労働人口に匹敵する。そして、その膨大な人口が今後の国の開発の大きな資源であると同時に、人口問題そして雇用問題の大き



ジャカルタ市内各区にある地区事務所

な問題の要因でもある。

インドネシアの人々そしてその文化もその広大な国土、人口を反映し極めて多様性をもったものとなっている。例えば、言語は細かく分ければ二五〇以上、代表的なものをとっても一四ほどあるという。これらは、全体としてはいわゆるマライポリネシア系の言語であり似かよった言葉ではあるが、これらの地方語（種族語）は日本という方言の差などよりはるかに異なっており、もちろん地方語ではお互いのコミュニケーションはできない。人種的には、大部分はいわゆるマレー系の人々であるが、西端のアチェなどはインド系の人々の影響が強く、またバリ島以西からイリアンジャヤまではメラネシア系の人々であつて顔付き、体付きも随分異なっている。

インドネシアは日本と比べれば大変新しい国である。また、日本のように長い間に自然に一つの国ができたというのではなく、かなりの程度人間がこの国を作ろうとして国造りをしてきた国でもある。たとえば、国語であるインドネシア語は多くの種族間の共通語としてかなり人工的に発展してきた言語であり、これを国語に定めているのは、現在のインドネシア共和国憲法であること、現在のマレーシアとの国境は植民地時代のオランダ領とイギリス領との境であることなどは、この国の新しさと日本などとは違う事情を示唆する一例であると思う。（ちなみにインドネシア語とマレー語とは同一の言語と言つてよい。）

インドネシアは多様性に富む国であり一面的な先入感から判断するとその理解を誤るような気がする。宗教の面からいってもインドネシアは不思議な国である。国民の九〇％はイスラム教徒であるが一般に思われているイスラム教徒とは大分趣が異なる。たとえば、インドネシアのイスラム教徒の中には酒をたしなむ人がおり、それも相当多数ではないかと思う。インドネシアの言葉でイスラム教に非常に忠実な人をサントリ（*santeh*）、それほどでもない人をアバンガン（*abang*）（*abang*）というが、ある調査ではイスラム教徒のうち八〇％がアバンガン

であったという。毎日のメッカに向かつてのお祈り、禁酒、断食、豚肉を食べないこと、などイスラム教にはいくつもの戒律があるが、その戒律を守る程度は人によりまちまちである。酔わなければ飲んでもイスラムの教えに反しないということをインドネシア人の友人から聞いたことがある。イスラム教徒が一年に一度一か月間行う断食についてもそれに対する対応も人によって様々である。今年の断食は、何日間が目標ということを自分で定めてこれに臨んでいる人もいる。断食の頃にゴルフ場の売店に軍服を着た男が立っていてキャデーがお客様からジュースやコーラをおごってもらうのを注意しているのを見たことがある。キャデーいわく「ここでは、あいつがいるからまずい。先の売店で飲まして欲しい。」ということである。(ちなみに国防という任務の他にさまざまな社会サービスを提供する国家建設の任務を持つという軍の役割を理解することはインドネシアを理解するうえで不可欠ではある。最近では、ジャカルタにもスーパーマーケットが林立し、その中のファーストフードの店は断食月の昼間も大はやりであるが、彼らがすべてイスラム教徒以外の人々とは思えないのである。人間関係も基本的には、東洋的な階級のあるいはたて社会であるように思える。日本と同様に集団での意志決定を大切にする傾向が見られる。インドネシア語を勉強して難しく感じるものの一つに、相手と呼ぶときに使う言葉の選択が難しいということがある。日本語と同様に相手の性、職業、社会的地位等によって微妙に異なり外国人には難しい。インドネシア政府は、相手が誰でも通用する英語の *you* に相当する単語(これはたまたま *anda* というが)を普及させようとしているがどうも定着する様子がない。そもそもインドネシアの社会には万人平等に使うことのできる二人称などは適していないかも知れない。

インドネシアは、人口が極めて局在化している。すなわち、国土面積としては全土の六%に満たないジャワ島に全人口の六〇%が居住している。これはそれ自身大きな問題であるが、このため私達の付き合

インドネシア人はジャワ人である場合が多く、ジャワ人の印象をインドネシア人全体の気質に当てはめる危険性があるがそれでも一般的に言っているインドネシア人は大変穏やかな、礼節を重んじ人との付き合いを大切にする国民といえる。特にジャワではソパンサントンという人との付き合いにおいて礼節を重んじることを尊ぶ文化があり、大変ソフトな表現をする人々である。ただし仕事において困るのはインドネシアの人が本当に賛同あるいは納得しているのかどうか分かりにくいことである。あまり面と向かって反論したり、拒否したりすることは礼節を失すると思われるのなかなか本心をはっきりとは言わない。ノーということは稀であり、そのため理解を誤って仕事で失敗することもある。家族関係、あるいは一つの組織の中の人間関係は複雑かつ洗練されているようで、以前私の家で働いていた女中さんが結婚をやめるときもまだ結婚していない彼女の姉の承認をもらうためにその所在を探していた。

ジャカルタも最近は車の洪水でそれぞれが道を歩くがごとく気ままに運転するので慣れないと少しこわい。私の乗っている車も何度か接触事故をおこなっているが日本のように言い争いになったことは今までにない。お互い車から降りてこないことも多い。私自身も相手のバックミラーにひっ付けたことがあるが相手は怒るところかこちらの顔も見ずに窓から手を出してバックミラーをなおしていた。私の関係する日本政府の技術協力プロジェクトにCEVESTという職業訓練校の運営があるがこれについて日本側(JICA)と先方政府との合同会議が年に一、二回開かれる。いわばフォーマルな国際会議であるが、ある時この会議資料がすべてインドネシア語で書かれていることがあった。もちろん会議は順調に進行するはずもなく延長となったのであるが、議長である工業省の総局長は担当者叱責することなどせず終始おだやかに議長役を務めていた。あとで担当者に聞いたら英語にする時間がなかった、という。日本ならそれなら徹夜してでもやれ、とい

うところだが、インドネシアでは他人のミスを叱責したり恥をかかせたりすることは良くないとされているようである。他人の過ちを許す寛容さが尊ばれ、それを持つことがえらい人の条件でもある。もつとも社会全体がそうなので互いに許しあい頼りあつてしまひ全体の効率を上げていることも間違いないが。

一般的にいつて、インドネシアの人々の考えかた、その行動様式は、イスラム教徒としてのそれとイスラム教が渡来する以前から彼らが持っていた文化に基づくヒンズー的あるいはインドネシア古来からの文化とが融合したものとが混然と混ざり合っているようである。日本でも、種々の様式、祭礼等では仏教のものであったり、神道に由来するものであったり、あるいはどちらか区別がつかないようなものもあるが、文化が西から西から訪れてその地においてその土地に重層的に定着していったという点では日本と共通なものがあるのかも知れない。

このインドネシアも独立から四〇年余りを経過し、道路や通信施設等のいわゆる社会インフラ、政治機構及びイデオロギー、教育、さらに言語まで社会のすべての分野において国造りをしてきた結果、近年相当の近代化を成し遂げてきていることは間違いないようである。

(もちろんニックスと呼ばれている国々などには及ばないが)

政治的イデオロギーとしては、すべてパンチャシラ(五原則)といわれるインドネシア独特のイデオロギーに基づいている。パンチャシラとは、元々はスカルノ前大統領が考え出したもので、その内容は、一言でいえば、① 唯一の神への信仰、② 人道主義、③ 民族の統一、④ 民主主義、⑤ 社会正義、の五原則である。パンチャシラは、現在の憲法の前文にうたわれている。

すべての社会事象をこのパンチャシラという哲学でとらえ、法律、政策もすべてこのパンチャシラに基づいている。パンチャシラ自身は大変理解するのに難しくインドネシア自身でも完全に理解している人は少ないそうであるが、特に私達外国人が、誤解しやすいのはこれら

の原則のうち①の唯一の神への信仰、と④の民主主義であると思う。

①については、前に書いたとおりインドネシアはイスラム国家であるという誤解がしばしばあるが、これはお互いの信仰を尊重し、自らは自らの信仰に捧げるといった意味ではないかと思う。イスラム教以外には、キリスト教（人口の六％程度）、ヒンズー教（二％）、そして、仏教（一％）があるが軍の何かの式典で表彰を受ける者を陸軍、海軍、空軍、そして、警察軍の四軍のそれぞれから選んだ表彰者をこれらの四つの宗教の信者に振り当てていたことがあった。ジャカルタの東洋一のイステイクルールモスクの真正面には巨大なキリスト教の教会がある。政府はこの点について大変気を使っている。インドネシア労働省のある課長にインドネシアでは何を信仰してもいいのか、精霊信仰なども許されるのかと聞いたことがあるが、なんでも構わない。とにかく人それぞれ自分に信仰を持っていればいい。との返答があった。

（実際ジャワに古くからあるクバテイナンという神秘主義を信じる人も多いという。）また、④の民主主義であるが、これも一般に理解されている民主主義とは少しニュアンスが異なっているのではないかと思われる。インドネシア人は、単純な多数決を嫌う傾向がある。何かを決定するさいに、少数の反対意見があったとすると私達はすぐに多数決原理というものを想定するが、インドネシアでは少数の反対意見の者を大変なエネルギーを費やして説得して最終的には全会一致の決定をめざす慣習がある。この全会一致をめざす慣習をムシャワラといい、全会一致のことをムファアカットというが、インドネシアの民主主義はまさにムシャワラとムファアカットの民主主義といってよい。この過程は、たとえば、私の担当分野である労働の場においても、労働組合（全インドネシア労働組合）の委員長の選任の経緯はこの例にあたると思う。前委員長は、結局先の総会で敗れたのであるが、当初の票数としては四六人の代議員二八対一八で総会においては優勢であったと聞



ジャカルタ市内。明るい元気な子を育てるのは、母の願い

広大な国土、膨大な人口を有し、多くの多様性を内包しながら、この国独特のイデオロギーにより独立後約四〇年間国造りを進めてきたわけであるが、七〇年代の石油価格の高騰などこの国にとっては有利な国際的経済状況にも恵まれ、順調な発展を続けてきたといえる。しかし、昨今の経済情勢はインドネシアにとっては極めて厳しい状況に変わってきている。国家財政収

くがこの少数派がなかなか承知せず新たに委員長選任のための小委員会を開き延々と一晩ムシヤワラを行った結果逆に負けてしまったことがある。とにかくインドネシアの人々は一つのことを決定するのに大変時間をかける。誰の顔もつぶさないようにしてしかも全会一致の結論を得ようとするという一見面倒くさい手続きをとる。インドネシアでは、何を決めるのも日本に比べて大変スローモーでインドネシアの社会の非効率性はその原因を求める傾向があるが、このスローモーさの原因の一つとしてこの意志決定手続きがあるのかも知れない。パンチャシラについては、公務員あるいはこれに準ずる公的機関の職員はこれを正しく理解し実践するための研修を必ず受けることになっている。ただし、私の印象ではこのパンチャシラもすべての庶民が完全にこれを理解している程には普及していないのではないか、あくまでも政府主導によりこのイデオロギーを建国及び国の発展の哲学として普及させて行こうとしている段階なのではないかと思われる。

入の五五％を石油に頼る国であるが、その価格の暴落、また、その他の一次産品市況の低迷はマクロの経済指標を見る限りインドネシアの経済に対して極めて大きな打撃を与えておりこの国に住む外国人としても何とかこの窮状を克服してもらいたいものである。

経済の話に関しては他に詳しい記述があると思うが、典型的な一次産品輸出国であるインドネシアは、その輸入国である日本との経済的な結び付きは強く、いわば相互に補完しあうかたちとなっている。外国投資のうち金額では三五％、投資件数では二五％が日本からのものであり当然のように他を引き離して一位であるほか、政府ベースの二国間援助も日本が全体の四〇％を占めており、累積援助額は世界一位であるなど少なくとも経済的にはインドネシアと日本との関係は大変緊密であるといえる。国際問題の専門家でもなくインドネシアに赴任して一年半余りの私にはまだまだ分からないことも多いのであるが、よく言われることであるが、経済的なつながりに比べて相互の理解は十分とはいえないと思えるのである。日本人にとってインドネシアは意識としては遠い国なのではないかと思う。相手国に対する関心はインドネシア人の方が高いのではないか。たとえば、この国の新聞や、テレビに日本のことが報道されない日はほとんどないといってよい。おそらく新聞には毎日二十以上の日本関係の記事が掲載されるのではないかと思われる。インドネシアに居ても日本のことは大体分かるといつてよい。日本においてインドネシアに関する記事といえばおそらくジャカルタの日本大使館への砲弾事件、あるいは、わずかにルピア切り下げの記事ぐらいかも知れない。一方インドネシアの人あるいは政府の日本に対する関心は大変高いといつてよい。また、親日的な国でもある。親日的などという感傷的な言葉でものごとを判断することは短絡に過ぎるが、たとえば日本に対する呼び名であるが、先進国（*negara maju*）、工業国（*negara industri*）などだけでなく、新聞などでは頻繁に「さくらの国（*negara sakura*）」という言葉を用い

る。「日の出づる国（negara matahari terbit）」などというのを見たことがある。素人目にはインドネシアの日本に対する感情は悪くはないと思えるのである。前述の労働組合の前委員長であったアグス・スドノという人は、パーティーの席上に私の世代には少しなじみのうすい「愛国の花」という歌を必ず日本語で歌うのであるが、この歌は皇太子ご夫妻のインドネシア訪問のさいにスカルノ前大統領が自らインドネシア語に翻訳してご夫妻の前で三千人の小学生に歌わせた歌であると最近知ったのである。前述のような極めて緊密な経済関係とは裏腹に、月並みな話ではあるが意識あるいは関心といった点で、憂慮されるような一方通行があつてはいけないと素人ながら思うのである。

"人口・開発、関係刊行物紹介

●人口事典―用語解説・統計資料

編集 人口問題協議会
発行 東洋経済新報社
定価 三〇〇〇円

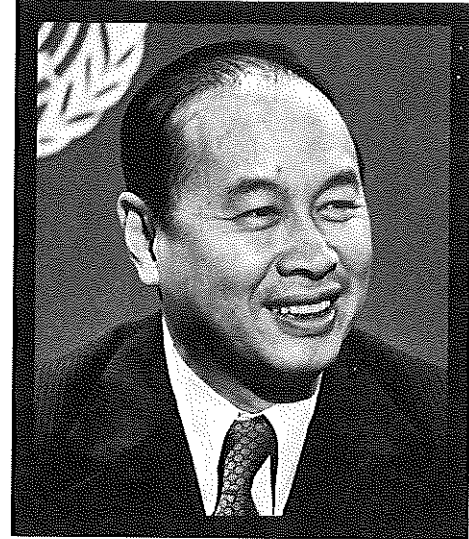
●一九八七年版 高令化社会基礎資料年鑑

編集・発行

エイジング総合研究センター

発売 中央法規出版
定価 一万八千円
B5判・650頁

人口問題に献身した



R・サラス国連人口
活動基金事務局長
が逝去

国連人口活動基金の事務局長であり、国連事務次長のラファエル・M・サラス氏が三月四日、ワシントンのホテルで急逝された。五十八才。米議会指導者との協議のためワシントンを訪問中のできごとで、心臓発作が原因とみられ、人口問題解決のため世界各国を献身的に奔走された同氏の死去は、偉大な人口問題の指導者を失った悲しみで、世界各国の関係者に大きなショックを与えている。

サラス氏は、フィリピン大学を卒業後、ハーバード大学で政治修士号を取得、政府入りし、多くの要職につき政府官房長官はじめ、一九六六年から三年間、内閣主席大臣を務めた。フィリピンの「緑の革命」プログラムでは実行委員となり、フィリピンを米の輸入国から輸出国へ変えるなど活躍した。著書に「国際人口援助の理論と政策」(一九七九年)、「人間の尊厳のために——人口問題への多国間的アプローチ」(一九七六年)がある。

1月23日

本協会制作スライドに関し、視聴覚専門家による研究会

2月23日

25日

「第三回人口と開発に関するアジア国会議員代表者会議（主催APDA）」及び「人口と開発に関するアジア議員フォーラム・運営委員会」開催。於タイ国バンコク、国会議事堂会議場、ESCAP会議場。

2月26日

3月2日

ネパール国会議員・人口専門家受入。D・S・ラナ議員、他二名計三名。国際人口問題議員懇談会メンバーと交流。

2月26日

「昭和六十一年度日本船舶振興会補助事業完了報告書」提出。事業内容 ①出版「日本の労働力人口と開発」（和文、英文）②スライド「日本の産業発展と人口——その原動力・電気」（日、英、中、インドネシア語）③レポート「人口と開発関連統計集」（和文、英文）。

3月20日

農林水産省委託昭和六十一年度アジア諸国の農村人口と農業開発に関する調査委託事業実績報告書を農林水産省経済局長に提出。

3月31日

昭和六十一年度東南アジア諸国等人口・開発基礎調査事業報告書を（社）国際厚生事業団に提出。

財団法人アジア人口・開発協会発足並びに議員活動

一九七三・十 (十・十三・二十八)	アジア人口事情視察団派遣(インド、タイ、インドネシア、フィリピン) 国會議員(日本) 岸 信介(団長)、田中龍夫、八田貞義、佐藤 隆、山崎竜男、加藤シズエ、阿部昭吾 その他 W・ドレーパー、J・タイディングス、花村仁八郎、官庁、マスコミ関係等
一九七四・四・一	『国際人口問題議員懇談会』設立(会長・岸 信介) 衆・参超党派議員一一九名で発足。 ☆世界で初の試みである。
一九七四・四・二十五	『食糧と人口に関する宣言』：国連式典 (於・国連本部) 宣言書署名・佐藤 隆 ○八月及び十一月の世界人口・食糧会議に先立ち、各国政府に現実的且つ果敢な諸政策を採るよう要請する五項目から成る。 ○人口・食糧問題解決の為、国連にリーダーシップをとることを要請した宣言文。

一九七四・八 (八・十九～三十)	「第三回 国際人口会議」 (於…ブカレスト) 総勢 四五〇〇人 齊藤邦吉(元厚生大臣)、八田貞義、佐藤 隆、 堂森芳夫、柏原ヤス、中沢伊登子 他
一九七四・十	「I P U 列国議会同盟会議」 (於…東京) 参加国…六十五カ国 佐藤 隆代議士 「食糧と人口問題」ライス・バンク構想を 提唱。
一九七七・九 (九・三～十八)	中南米家族計画視察団(メキシコ、コロンビア、ブラ ジル、アメリカ、カナダ) 国会議員(八名) 岸 信介(団長)、佐藤 隆、住 栄作、 安孫子藤吉、和田耕作、阿部昭吾、福岡義登、 吉寺 宏、他 顧問団(十六名) 大来佐武郎、花村仁八郎 他 U N F P A 二名、事務局五名 ○先進国にも、途上国にも、人口問題議員グループ を結成させるべく、各国立法府議員に呼びかけた。

一九七七・十二 (十二・五・十一)	「人口と開発先進国会議」 (ロンドン、ボン、ベルリン) 参加国…日、米、英、加、西独(五カ国…十六名) 日本側…佐藤 隆、和田耕作、土井たか子 ○一九七七年九月の中南米視察に引続き各国立法府議員への呼びかけ。 ○国際議員会議の開催について討議。
一九七八・三 (三・二十八・三十)	「人口と開発列国国會議員(IPOP)東京会議」 ― 第一回 国際会議準備会議 ― 参加国…米、英、加、西独、インド、スリランカ、メキシコ、ブラジル、コロンビア(九カ国四十名)、日本(十名) ○運営委員メンバー国、○参加国、○議事日程、○予算
一九七八・十 (十・十六・十七)	「IPOP国際会議準備委員会」(第二回) (於…チュニジア) 日本側参加者…佐藤 隆 他 ○開催国、○主催機関、○議題 etc、について
一九七九・三	IPOP国際会議準備委員会」(第三回) (於…メキシコ) 日本側参加者…佐藤 隆 他 ○「宣言」の草案作成、○会議規定、○日程 etc

一九七九・八 (八・二十六) 九・二)	「IPOP 国際会議」 (於…スリランカ) 参加国…六十四カ国 他、国連各機関、IPPF 等 総勢 五五〇名 日本側…岸 信介、佐藤 隆、石本 茂、中村啓一、 柏原ヤス ☆人口問題議員グループ、結成国二十五カ国を超 えるに到ったので、UNFPA に働きかけ、コ ロンボで開催。 一、「コロンボ宣言」採択 この宣言により、一九八一年、アフリカ、 ヨーロッパ、アジアの各大陸での人口会議 が開かれた。 一九八一年 七月 ケニヤのナイロビに 於て 十月 中国の北京に於て 十二月 仏、ストラスブール に於て 一九八二年十二月 ブラジルのリオデジ ヤネイロに於て (予定)
一九八〇・九 (九・十・十三)	「資源、人口、開発に関するアセアン国会議員代表者 会議」 (於…クアラルンプール) 参加国…シンガポール、マレーシア、タイ、フィリ ピン、インドネシア(五カ国) 日本側…佐藤 隆、住 栄作、井上晋方 ○日本はオブザーバーとして参加をし、北京会議 開催を提案。合意を取付けた。

一九八〇・十一	「人口と開発に関するアジア国会議員会議」 日・中打合せ （於…北京） 佐藤 隆、井上晋方 ○開催地北京への正式な可能性打診
一九八一・二	「人口と開発に関するアジア国会議員会議」 第一回運営委員会 （於…東京） 参加国…日本、中国、インド、スリランカ、 マレーシア ○政治、イデオロギーの問題の除外について
一九八一・三・二十三	佐藤 隆代議士——国連開発計画（UNDP）と アドバイザー契約締結 ○一九七九年八月の「コロンボ宣言」に基づく、 地域IPOP会議の開催とそのフォローアップ を任務とする。
一九八一・六 （六・十九～二十）	「人口と開発に関するアジア国会議員会議」 第二回運営委員会 （於…北京） 参加国…日本、中国、インド、スリランカ 他 UNFPA 日本側…佐藤 隆、住 栄作、 土井たか子 他五名

一九八一・十
(十・二十七、三十)

「人口と開発に関するアジア国会議員会議」

開催地…中国北京市
会場…人民大会堂

(1) 日本側出席者…

1、	2、	3、	4、	5、	6、	7、	8、	9、	10、	11、	12、	13、	14、	15、	16、	17、	18、	19、	20、
、団長	佐藤	住	関谷	桜井	栗山	石本	田代	井上	土井	福岡	川本	片山	有島	柏原	矢追	和田	柄谷	山口	阿部
福田	藤		勝				由紀男	晋方	たか子	義登	敏美	甚市	重武	ヤス	秀彦	耕作	道一	敏夫	昭吾
夫(衆・自)	隆(〃)	栄作(〃)	嗣(〃)	新(〃)	明(〃)	茂(参・自)	(〃)	(衆・社)	(〃)	(〃)	(〃)	(参・社)	(衆・公)	(参・公)	(〃)	(衆・民社)	(参・民社)	(衆・新自)	(衆・社民連)

秘書数名

同時通訳者 三名

事務局 三名

	一九八一・十・三十
(2) 議長 長・廖承志（中国全人代副委員長） 副議長 佐藤隆 他五名 司 会 陳慕華（中国副総理） 起草委員 住 栄作 他五名 (3) 主なる日程 ① 第一日目（十月二十七日） ○ 福田元首相の特別講演 ○ 福田元首相、国連平和賞受賞 ② 第二日目（十月二十八日） ○ 黒田俊夫博士の 「日本の人口変動の傾向と展望」講演 ③ 第三日目（十月二十九日） ○ 住代議士によるカントリー・レポート発表 ④ 最終日（十月三十日） ○ 北京宣言採択	「人口と開発に関するアジア国会議員会議 第三回運営委員会」（北京会議最終日同地にて）

一九八二・二・十

財団法人アジア人口・開発協会 創立

☆北京会議時の第三回運営委員会に於て、発議された「アジア議員フォーラム」の活動母体として創された。

理事長…田中 龍夫（衆議院議員自民党総務会長）

副理事長…佐藤 隆（自民党副幹事長）

理事…住 栄作（自民党総務局長）

〃 〃 花村仁八郎（経団連副会長）

〃 〃 前田福三郎（日本電波塔社長）

監事…斎田慶四郎（勸家族計画国際協力財団事務局長）

一九八二・三
(三・八・九)

「人口と開発に関するアジア議員フォーラム暫定委員会」
(於…ニューデリー)

参加国…六ヶ国…中国、日本、マレーシア、スリラ

ンカ、インド、オーストラリア

他機関…UNFPA、IPPF、AYCP

日本側…佐藤 隆、井上晋方 他人口問題専門家

○一九八一年十月三十日付「北京宣言」に
基づき「Asian Forum of Parliamen-

tarians on Population and

Development (A. F. P. P. D.)「人口と

開発に関するアジア議員フォーラム」

を正式に発足。

○AFPPD発足に伴い、この委員会は
そのままAFPPD第一回運営委員会
となった。

一九八二・八 (八・二一三)	「人口と開発に関するアジア議員フォーラム第一回準備運営委員会」 (於…マニラ) 参加国…日本、中国、インド、スリランカ、オーストラリア、フィリピン、他UNDP、UNFPA等 議長…佐藤 隆 ○準備委員会及び大会参加国等について (準備運営委員会役員にフィリピンが加わった)
一九八二・十二 (十二・二一五)	「人口と開発に関するブラジル会議」 (於…ブラジル) 参加国…西半球諸国二十ヶ国 議題…西半球諸国の開発・人口・婦人の地位・子供の保護・移民の各問題について。 宣言…各国に「人口と開発に関する国内議員委員会」を形成し、議題としてとりあげた諸問題の改善に向け、積極的に努力する。

一九八三・三
(三・七・九)

「元大統領・首相会議設立委員会」

(於…ウィーン、ホーフブルグ王宮)

主催…人口と開発に関するグローバル・コミッティ
共催…国連開発計画(UNDP)

発起人メンバー…

日 本・福田赳夫元首相

ウィーン・ワルトハイム前国連事務総長

ルーマニア・マネスク元首相

セネガル・サンゴール前大統領

コロンビア・パストラーナ・ボレロ元大統領

チュニジア・ヌイラ元首相

オブザーバー…イギリス・ヒース元首相

第一回執行委員会…'83年5月東京で開催予定

本会議…'83年秋開催予定

一九八三・五
(五・十九・二十)

元大統領・首相会議執行委員会

(於…東京)

福田赳夫元首相

ワルトハイム前国連事務総長

ボレロ元コロンビア大統領

第一回本会議…'83年11月中旬オーストリアで開催
予定

一九八三・七・七

財団法人アジア人口・開発協会理事会

厚生、外務、農林水産三省共管認可法人に拡大して
初の理事会で新たに次の十氏が理事に就任。

〈人口・開発・食糧分野〉

理事…黒田 俊夫（日大人口研究所顧問）

〃…川野 重任（東大名誉教授）

〃…小林 和正（日大人口研究所教授）

〈科学技術・エネルギー・資源分野〉

理事…本多 健一（東大工学部教授）

〃…森 一久（日本原子力産業会議専務理事）

〃…武田修三郎（東海大工学部教授）

〈行政OB・官界〉

理事…内村 良英（元農林事務次官）

〃…翁 久次郎（元厚生事務次官）

〃…須之部量三（前外務事務次官）

〈経 済 界〉

理事…房野 夏明（経団連総務部長）

一九八三・十
（十・十一・十二）

「人口と開発に関するアジア議員フォーラム第二回準備運営委員会」
（於…バンコク）

参加国…日本、中国、インド、フィリピン、

UNDP、UNFPA、IPPF

議長…佐藤 隆

○大会参加国等について

「一九八三・十一」
（十六・十八）

「元大統領・首相会議第一回総会」

（於…ウィーン、ホーフブルグ王宮）

主 催…人口と開発に関するグローバル・コミッティー
共 催…国連開発計画（UNDP）

召 集 者…福田赳夫

議 長…クルト・ワルトハイム（前国連事務総長）
事務総長…ブラッドフォード・モース（UNDP事務総長）

構成国…（二十六カ国）

○日 本…福田 赳夫

○国 際 連 合…クルト・ワルトハイム

○カメルーン…アーマッド・アヒジョ

○イタリ ア…ジュリオ・アンドレオッティ

○ネパール…キルティ・ニデイー・ビスタ

○イギリス…ジェームス・キャラハン

○フランス…ジャック・シャバン・デルマ

○タ イ…クリマンサック・チョマナン

○ザンビア…マテイアス・マインツア・チョーナ

○ハンガリー…イエノ・ホック

○オーストラリア…マルコム・フレージャー

○アルゼンチン…アルトゥーロ・フロンデシイ

○ス イ ス…クルト・フルグラール

○レバノン…セリム・ホス

○ルーマニア…マネア・マネスキュー

○ジャマイカ…ミハエル・マンレー

○チュニジア…ヘデイー・ヌイラ

○ナイジェリア…オルセグン・オバサンジョ

○モ ロ ッ コ…アハメッド・オスマン

○コロンビア…ミサエル・パストラーナ・ボレロ

○ベネズエラ…カルロス・アンドレス・ペレ

一九八四・二・十六	○ポルトガル・マリア・ド・ルールド・ピントシルゴ ○ユーゴスラビア・ミチャ・リビチツチ ○西ドイツ・ヘルムート・シュミット ○セネガル・レオポルド・セタール・サンゴール ○スウェーデン・オラ・ウルステン
一九八四・二・十六	「人口と開発に関するアジア議員フォーラム第二回運営委員会」 （於・ニューデリー） 参加国・日本、中国、スリランカ、インド、オーストラリア 議長・佐藤 隆 ○第一回大会の具体的手順及び大会以降の展開について
一九八四・二・十七、二十	「人口と開発に関するアジア議員フォーラム第一回大会」 開催地・インド・ニューデリー 会場・ビギャン・バワン（国際会議場） 参加者・三十一カ国、四十七機関・二百九十七名 (1) 日本側出席者 1、名誉団長 福田 赳夫（衆・自） 2、団 長 佐藤 隆（ 〃 ） 3、副団長 井上 普方（衆・社） 4、 阿部 昭吾（衆・社民連） 5、 矢追 秀彦（衆・公） 6、 安孫子藤吉（参・自） 7、 柄谷 道一（参・民社） 8、 石井 一二（参・自） 9、 倉田 寛之（ 〃 ）

	一九八四・二・二十
(2) 議長…バルラム・ジャカル（インド国会議長） 司会…サット・ポール・ミッター（アジ アフォーラム事務総長） 起草委員…石井一二 他五名 (3) 主なる日程 ① 第一日目（二月十七日） 福田赳夫元首相（グローバル・コミッティ会 長）・歓迎挨拶 インデラ・ガンジーインド首相・歓迎挨拶 ヘルムット・シュミット西独前首相基調演説 ② 第二日目（二月十八日） 黒田俊夫博士「国家開発政策——人口と開発 の新次元」講演 ③ 第三日目（二月十九日） ランジット・アタパト・スリランカ厚生大臣 「スリランカ・住民参加」講演 ④ 最終日 ニューデリ宣言採択	「人口と開発に関するアジアフォーラム・各国代表者 会議」 参加国…AFPPD公式参加国（十六カ国） UNDP・UNFPA・IPPF 議長…佐藤 隆 ○AFPPD活動方針と展望、今後の活動計画に ついて

一九八四・八
(八・六十四)

「国連・国際人口会議」

(於…メキシコ)

参加国…百四十九カ国

日本政府首席代表・湯川宏厚生政務次官

日本政府顧問団

田中龍夫(衆議院議員・自)
佐藤隆(衆議院議員・自)
水田稔(衆議院議員・社)
永井孝信(衆議院議員・社)
矢追秀彦(衆議院議員・公)
柄谷道一(参議院議員・民)
石井一二(参議院議員・自)
黒田俊夫(厚生省人口問題審議会委員)
安川正彬(厚生省人口問題審議会委員)

一九八四・八
(十五・十六)

「人口と開発に関する国際議員会議」(於…メキシコ)
参加国…六十カ国

日本代表団

福田赳夫(衆議院議員・自)
田中龍夫(衆議院議員・自)
佐藤隆(衆議院議員・自)
水田稔(衆議院議員・社)
永井孝信(衆議院議員・社)
矢追秀彦(衆議院議員・公)
柄谷道一(参議院議員・民)
石井一二(参議院議員・自)
三塚博(衆議院議員・自)

一九八五・二
(二・五・七)

「第一回人口と開発に関するアジア国会議員代表者会議」
(於…東京・外務省国際会議室)

主催…財団法人・アジア人口・開発協会(A P D A)

出席者…○日本…福田赳夫、田中龍夫、佐藤隆、住

栄作、関谷勝嗣、鹿野道彦、桜井

新(衆・自民)

安孫子藤吉、倉田寛之、石井一二

(参・自民)

井上晋方(衆・社会)

矢追秀彦(衆・公明)

高桑栄松(参・公明)

塩田 晋(衆・民社)

柄谷道一(参・民社)

阿部昭吾(衆・社民連)

○オーストラリア…B・J・グッドラック

○中国…許濤新、何理良

○インド…S・P・ミッター

○インドネシア…マルトノ移住大臣

○韓国…モイム キン

○マレーシア…ラーマ オスマン交通副大

臣

○ネパール…ドロン シュム シャーラナ

○フィリピン…カルメンシータ レイエス

国務副大臣

○スリランカ…ランジット アタバト厚生

大臣

○タイ…ブンテイウム カマピラド運輸通

信副大臣

日程…第一日目（二月五日）

開会式 A P D A 理事長・田中龍夫挨拶

内閣総理大臣・中曽根康弘（山崎拓内閣
官房副長官代理）

外務大臣・安倍晋太郎（森山眞弓外務政
務次官代理）

財団法人日本船舶振興会会長・笹川良一
（同財団理事長篠田雄次郎代理）

がそれぞれ祝辞

人口と開発に関するアジア議員フォーラ

ム事務総長・S・P・ミッター挨拶

感謝状贈呈 財団法人・日本船舶振興会

会長 笹川良一（二月五日夕、マツヤサ
ロンで贈呈）

国連人口活動基金事務局長 R・サラス

基調講演…国連人口活動基金事務局長

R・サラス

本会議…セッションI ランジット ア

タバト・スリランカ厚生大臣を議長に選
出

セッションII 問題提起

中国人口基礎調査

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

小林和正（日大人口研究所教授）

インド農村人口と農業開発調査

川野重任（東京大学名誉教授）

大内 穂（アジア経済研究所経済成長
調査部長）

	タイ人口と開発基礎調査・社会福祉関連調査 黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長） 山本幹夫（帝京大客員教授・総合保健研究所長） 日本の人口転換と農村開発 岡崎陽一（厚生省人口問題研究所長） 阿部 誠（厚生省人口問題研究所人口資質部長） 日本の農業・農村開発と人口——その軌跡（スライド） 第二日目（二月六日） セッションⅢ・Ⅳ 総括討論 第三日目（二月七日） セッションⅤ 閉会
一九八五・四 （二十四～二十六）	「元大統領・首相会議第三回総会」 （於・パリ国際会議場） 名誉議長…福田赳夫元首相 議長…ワルトハイム前国連事務総長 事務総長…ブラッドフォード・モースUNDP事務総長 参加国…二十四ヶ国 ○それまでの、三つの主要課題に加え、人口問題が取り上げられることに決定。 ○第四回総会は、一九八五年四月、日本で開催される予定。

	○佐藤隆代議士（人口と開発に関する世界委員会常任理事）が、特別講演を行ない、OBサミットで人類の生存と平和を脅かす「人口問題」を取りあげるよう進言。その結果、主要課題の一つにすることを決定。人口問題に関するタスクフォースを組織し、主幹に福田赳夫元首相が就任することになった。
一九八五・五 （十三、十四日）	「第二回人口と開発に関するインド議員会議」 （於…ニューデリー国際会議場） 参加者数…約四百名 ○日本からは、佐藤隆代議士（人口と開発に関するアジア議員フォーラム議長）が、開会式に来賓として出席、基調講演した。
一九八六・三 （三・三、五）	「第二回人口と開発に関するアジア国会議員代表者会議」 （於…東京・経団連国際会議場） 主催…財団法人・アジア人口・開発協会（APDA） 出席者…○日本…福田赳夫、田中龍夫、佐藤隆、住栄作、鹿野道彦、桜井新（衆・自民） 安孫子藤吉、林寛子、石井一二 （参・自民） 水田稔、土井たか子（衆・社会） 矢追秀彦（衆・公明） 高桑栄松、塩出啓典（参・公明） 柄谷道一（参・民社） ○中国…何理良 ○インド…S・P・ミッター、D・C・ジャイン

○インドネシア・マルトノ移住大臣
○韓国・ジャンスック・キム
○スリランカ・P・M・Bシリル県大臣
○タイ・ブンテイウム・カマピラド運輸通
信副大臣

日程：第一日目（三月三日）

開会式（司会 林 寛子）

APDA理事長・田中龍夫挨拶

外務大臣・安倍晋太郎（浦野焦興外務政
務次官代理）挨拶

国際人口問題議員懇談会会長・福田赳夫
歓迎挨拶

人口と開発に関するアジア議員フォーラ
ム事務総長・S・P・ミッター参加者
代表挨拶

国連人口活動基金事務局長 R・サラス
来賓挨拶

本会議・セッションⅠ 住 栄作議員を議
長に選出

セッションⅠ-1・2 問題提起

中国人口家族計画基礎調査

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

小林和正（日大人口研究所教授）

インド人口・開発基礎調査

嵯峨座晴夫（早稲田大学文学部教授）

タイ農村人口と農業開発調査

川野重任（東京大学名誉教授）

原 洋之介（東京大学東洋文化研究所

助教授）

バンコクの人口都市化と生活環境・福祉
調査

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

ネパール人口家族計画基礎調査

松本信雄（東京慈恵会医科大学教授）

大内 穂（アジア経済研究所経済成長
調査部長）

日本の人口都市化と開発

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

岡崎陽一（厚生省人口問題研究所長）

日本の都市化と人口（スライド）

セッションⅠ－3 討議

第二日目（三月四日）

セッションⅡ（議長 住栄作議員）

各国カントリレポート及び討議

セッションⅢ（議長 佐藤 隆議員）

総括討議

閉会式

第三日目（三月五日）

都内視察

一九八六・五 (五・十二、十六)	「人口と開発に関するアフリカ国会議員会議 開催地…ジンバブエ・ハラレ市 参加国…三十九ヶ国 主催…人口と開発に関する国会議員世界委員会 ジンバブエ議会 *『ハラレ宣言』採択 ○アフリカの議会制度を持つ国は三十六ヶ国、 この内三十一ヶ国と議会制度を持たぬ国八ヶ 国がオブザーバーとして参加したが、これは アフリカにおいて過去開催された議員会議の 中で最大規模のもの。
一九八六・九 (九・二十六、十二)	ネパール人口事情視察議員団派遣 参加議員(計十名) 福田超夫(名誉団長)、田中龍夫(団長)、 佐藤 隆、桜井 新、金子みつ、矢追秀彦、 安倍基雄、扇 千景、石井一二、高桑栄松 ○ネパールに発足したての人口・開発議員連盟 等との会議も行なわれた。
一九八六・十 (十・六、七)	「人口と開発に関するアフリカ議員カウンシル」発足 会議 開催地…ケニヤ・ナイロビ市 参加国…アフリカ十三ヶ国、他五ヶ国、他九機関 ○同年五月十六日付ジンバブエにて採択された 「ハラレ宣言」に基づき、アフリカ地域におけ る各国の人口・開発議員グループ間での意見 交換等の活動を調整・促進、また「ハラレ宣 言」をフォローする等のため同カウンシルを 正式に発足したもの。 初代議長には、マダガスカルのジャン・ルイ・ ラモンドライアソア氏が就任。

一九八六・六 (十・十七・十八)	「人口と開発に関するアジア議員フォーラム運営委員会」 (於…ジャカルタ) 参加国…日本、中国、スリランカ、インド、シリア、インドネシア、他八機関 議長…佐藤 隆(日本) ○第二回 A F P D 総会を一九八七年十月二十 〜二十三日、北京にて開催することを正式に 決定。
一九八七・二 (二・二十三・ 二十四)	「第三回人口と開発に関するアジア国會議員代表者会議」 (於…バンコク・タイ国国會議事堂 エスカップ会議場) 主 催…財団法人アジア人口・開発協会(A P D A) 出席者…○日本…福田赳夫、佐藤隆(衆・自民) 林寛子、石井一二(参・自民) 伊藤忠治(衆・社会) 有島重武(衆・公明) 阿部昭吾(衆・社民連) ○中国…ヤン・レン・ヤン、何理良 ○インド…S・P ミッタール、M・プラシヤド ○インドネシア…マルトノ移住大臣 ○韓国…K・J・ドング ○マレーシア…R・オスマン運輸副大臣 ○ネパール…D・S・ラナ、P・B・サポクタ ○シリア…H・サディック ○スリランカ…U・B・ウイジェクーン (ジャフナ自治大臣)

○タイⅡプラソップ・R、M・L・トリド
シュス、V・ビトゥーン・O、プ
アングルト・W、ブーンスク・L

日程…第一日目（二月二十三日）

開会式（於…タイ国会議事堂会議場）

開会の辞…ウクリット・M（タイ国国会

議長）

主催者挨拶…佐藤隆（APDA副理事長）

来賓挨拶Ⅱ J・S・シン（サラスUNF

PA事務局長・代理）

来賓挨拶Ⅱ 福田赳夫（国際人口問題議員

懇談会会長）

主催国挨拶Ⅱ プラソップ・R（タイ国人

口問題議員懇談会会長）

本会議…セッションI 問題提起・質疑

応答

（於…エスカップ・会議場）

議長…

インドネシア 人口・開発基礎調査

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

インドネシア 農村人口と農業開発調査

原 洋之介（東大東洋文化研究所助教

授）

タイ 村落レベルでの人口と開発

ミツチャイ・V（PCDP事務局長）

第二日目（二月二十四日）

セッションI—2 問題提起・質疑応答

（於…エスカップ会議場）

現在及び将来の開発計画に関する年齢構造変動の政策的合意

ニボン・デババルヤ（エスカップ人口部部長）

日本の労働力人口と開発

黒田俊夫（日大人口研究所名誉所長）

日本の産業発展と人口（スライド・制作APDA）

セッションⅡ―1／2

各国カントリーレポート発表および討議

総括討議

閉会式

本協会実施調査報告書及び出版物

昭和58年度

1. 中華人民共和国人口家族計画基礎調査報告書
Basic Survey on Population and Family Planning
in the People's Republic of China (英語版)
生育率和生活水平关系中日合作調査研究报告書
(中国語版)

昭和59年度

1. アジア諸国の農村人口と農業開発に関する調査報告書
——インド国——
Report on the Survey of Rural Population and
Agricultural Development in Asian Countries
——India—— (英語版)
2. 東南アジア諸国等人口・開発基礎調査報告書
——タイ国——
Report on the Basic Survey of Population and Deve-
lopment in Southeast Asian Countries
——Thailand ——

3. 日本の人口転換と農村開発

Demographic Transition in Japan and Rural Deve-
lopment (英語版)

4. Survey of Fertility and Living Standards in Chinese
Rural Areas —Data— All the households of two
villages in Jilin Province surveyed by questionnaires
(英語版)

关于中国农村的人口生育率与生活水平的调查报告
— 对于吉林省两个村进行全戸面談調査の結果 —
＝统计編＝ (中国語版)

5. スライド 日本の農業、農村開発と人口
— その軌跡 — (日本語版)

Agricultural & Rural Development and, Population
in Japan (英語版)

日本农业农村的发展和人口的推移 (中国語版)

Perkembangan Pertanian, Masyarakat Desa Dan
Kependudukan Di Jepang (インドネシア語版)

(以上4カ国版スライドは、日本産業教育スライドコ
ンクールにて優秀賞を受賞しました。)

昭和60年度

1. アジア諸国の農村人口と農業開発に関する調査報告書
——タイ国——

Report on the Survey of Rural Population and
Agricultural Development in Asian Countries
——Thailand—— (英語版)

2. 東南アジア諸国等人口・開発基礎調査報告書
——インド国——

Report on the Basic Survey of Population and
Development in Southeast Asian Countries
——India——

3. 中華人民共和国人口・家族計画第二次基礎調査報告書
Basic Survey (II) on Population and Family Planning
in the People's Republic of China
生育率和生活水平关系第二次中日合作调查研究报
告书 (中国語版)

4. ネパール王国人口・家族計画基礎調査
Basic Survey Report on Population and Family
Planning in the Kingdom of Nepal (英語版)

5. 日本の人口都市化と開発

Urbanization and Development in Japan (英語版)

6. バンコクの人口都市化と生活環境・福祉調査
——データ編——

Survey of Urbanization, Living Environment and
Welfare in Bangkok ——Data——
(英語版)

7. スライド

日本の都市化と人口 (日本語版)

Urbanization and Population in Japan (英語版)

日本的城市化与人口 (中国語版)

Urbanisasi Dan kependudukan Di Jepang
(インドネシア語版)

昭和61年度

1. アジア諸国の農村人口と農業開発に関する調査報告書
——インドネシア国——

Report on the Survey of Rural Population and
Agricultural Development in Asian Countries
——Indonesia—— (英語版)

2. 東南アジア諸国等人口・開発基礎調査報告書

——インドネシア国——

Report on the Basic Survey of Population and
Development in Southeast Asian Countries

——Indonesia——（英語版）

3. 在日留学生の学習と生活条件に関する研究

—— 人的能力開発の課題に即して ——

4. 日本の労働力人口と開発

Labor Force and Development in Japan（英語版）

5. 人口と開発関連統計集

Demographic and Socio-Economic Indicators on
Population and Development（英語版）

6. 日本の産業開発と人口

——その原動力・電力——（日本語版）

Industrial Development and Population in Japan

——The Prime Mover-Electricity——（英語版）

日本の产业发展与人口

——其原动力-曳气——（中国語版）

Pembangunan Industri dan kependudukandi Jepang

——Penggerak Utama-Tenga Listrik——

（インドネシア語版）

昭和62年3月31日発行(季刊)

「アジア 人口と開発」 №20

発行者 田 中 龍 夫

発行所 財団法人 アジア 人口・開発協会

〒100 千代田区永田町2-10-2

永田町TBRビル710号

TEL 03(581)7770(代表)